

防衛本能による認識 テロ事件後のアメリカ

『インターコミュニケーション』

No.39. Winter 2002, pp.158-160, (2001.12.発行)

橋本努

9月11日のテロ事件が起きたとき、私はニューヨークの自宅で朝食をとっていた。となりに住む夫妻が騒いでいるので、どうもおかしいと思いテレビをつけてみると、なんと世界貿易センターが崩壊しているのではないか。(ちょっと待ってくれ、だれか時間を巻き戻してくれ!!!) いったい何が起きたというのだ？

どうやら二機のハイジャックされた旅客機が二棟の超高層ビルに激突し、他の一機はペンタゴンにも激突したらしい。アメリカのテレビはその日、CMを入れずにツイン・タワー崩壊の映像を繰り返し放映した。事態の大きさからして、崩壊の場面を何百回と繰り返し見なければ、この状況を信じることはできなかつたであろう。とにかく納得がいかないのである。また、この事件が与えるであろう社会的・象徴的な意味は、あまりにも重大すぎてよく見えない。ただ物理的に震撼させられるばかりだ。その日は結局、私も多くの人たちと同様に、テレビを見ながら事態の深刻さを真剣に受け止めようとしていた。そして、亡くなった方々へのお悔やみの気持ちでいっぱいになった。

ニューヨークではこの日から、株式市場が一週間閉鎖されたほか、私が客員研究員として通うニューヨーク大学を含めて、ダウン・タウン地域が閉鎖された。多くの地下鉄は分断されて混乱状態が続き、街は閑散として悲しい空気に包まれた。それだけではない。ニューヨークでは至るところで爆弾テロのデマ騒ぎがあり、日常生活の全体が非日常的なムードにおおわれた。さらに今後はバイオ・テロリズムの可能性も高いというので、私の生活はまったくのお手上げ状態。つまり、次に起こるであろう事件に巻き込まれるかどうかは、防ぎようのない運の問題になってしまった。

事件翌日の新聞各誌は、まだ事態の全容を捉えていなかった。犯人は誰か。何が狙いで要求は何なのか。何をどのように報復すれば事態は解決するのか。この時点でオサマ・ビン・ラディンはまだ犯人として特定されていない。確実なのは、事件に巻き込まれた多くの人々が行方不明ないし負傷・死亡したということだけだ。しかしこれだけの惨事になると、人々の悲しみはすでにその許容量を超えている。日常的現実の感覚は、すでに麻痺している。

事件二日後、私は閑散とするマンハッタンの中心街タイムズ・スクエア付近を歩いてみた。

次に何が起こるか分からないという緊張した雰囲気の中で、多くの人々はどうやら自宅に待機しているらしい。通りには警備員や警察官のほか、ときどき時期を誤った観光客たちがいて、不安げに観光地図を広げている。何も楽しむものはなさそうだ。楽しいどころか、高層ビルの近くはどこも危険である。いったいはたして、この乱立する摩天楼はそろそろ廃墟になってしまうのではないか、という不安がよぎる。それならばこの都市の景観は、美的に昇華されておかねばならないだろう。その日のマンハッタンは、都市の美しさだけが悲しく際立っていた。

事件四日後、私はミッド・タウンの公園ユニオン・スクエアに足を運び、そこから震源地の近く、チャイナ・タウンまでを歩いた。ユニオン・スクエアは、行方不明者や犠牲者たちに捧げる花束や詩や蠟燭で覆われていた。そして人々は静かに、追悼の意を表情に浮かべていた。公園の中ほどでは、若い演奏家たちの荘厳な四重奏が流れ、ときどきパトカーや救急車のサイレンにもみ消されながらも、その演奏は周囲に集う人たちの心をとらえていた。人々は悲しみを共有するために、ここに来たのだろうか。しかしなにをどのように？どのような死の意味づけが適切なのだろうか。人々の死は、アメリカ的愛国主義の象徴か、ニューヨークの多文化的共存の象徴か、それともたんに、私的で幸福な生活を奪われた悲しみの集積にすぎないのだろうか…。

* * *

さて私の日記はこのくらいに留めて、考察を加えよう。

今回の同時多発テロ事件は、きわめて複雑かつ根本的である。テロリストたちの攻撃は、世界経済の中枢に穴をあけただけでなく、これまでの日常生活に対して抜本的な再考を迫った。アメリカでは多くの人々が、「もうこれまで通りにはいかない」というパラダイム・ロストの感覚を経験した。あらゆる既存の枠組みを再吟味しなければならないという、認知経済的にみてほとんど不可能な事態が発生したのである。

例えば、批判的合理主義者たちがするように、すぐれた理論が現れたらそれを既存の理論と取り替えればよいという正攻法は、通用しない。よい理論が現れる前に、これまでの思考習慣をすべて放棄しなければならないような感覚に襲われてしまう。既存の思考が前提としてきた諸条件を疑うのは、理性ではなくて不安である。その不安が頭をもたげてくる。犯人は社会に何を要求しているのか。今後の社会はどうなるのか。何を指針として生活すればよいのか。私たちの生活はなぜ狙われるのか……などなど。どうやら「我思う故に我あり」という命題よりも先に、「我テロられるがゆえに我存在させられり」という命題こそが、社会生活上の第一真理として現れてしまったようである。

こうした社会不安の中で、政治的にはデマゴグたちが生まれるよい土壌があっただろう。ここでデマゴグとは、犯人に代わって、何が要求であるのかを政治的に代弁する人たちのこと、例えば、「アメリカはこれまでの傲慢な態度を反省しろ」といった主張をする人

たちのことだ。もしかすると犯人たちは、自ら多くを語らず、デマゴグの発生を醸成し、文明の衝突を煽りたてることが狙いだったのかもしれない。いずれにせよデマゴグたちは、さまざまな主張を表明した。富と繁栄のシンボルに対する攻撃、アメリカの政治的・経済的・文化的ヘゲモニーに対する批判、抑圧された者たちの長年にわたって積もり積もった恨み辛みの爆発、先進国に対する決死の抗議、非倫理的な世俗生活に対する警告、自由社会に対する嫌悪、グローバリズムに対する批判、キリスト教対イスラム教の全面対決、いまだ中世的世界を生きるアラブ人たちの近代的価値観に対する敵意、イスラム教ファンダメンタリズムの反乱、アメリカの外交政策に対する根本的な批判、などである。

しかし政治地理学的に見れば、こうした問題を指摘するデマゴグたちは、相対的に不安の少ない周辺地域で発生したものの、ニューヨークを拠点とするマス・メディア各社の対応は慎重であったといえる。（例えばチョムスキーの論稿は、ニューヨーク・タイムズ紙への掲載を拒否された。）アメリカではこれまでのところ、デマゴグたちの力は小さい。おそらく事態はすでに「社会不安」の域を超えて、「戦争状態」にあるという認識が広がっているであろう。人々は、テロ攻撃に対して一種の「防衛本能」を働かせている。そしてこの防衛本能は、人々のあいだに次のような三つの認識態度をもたらしたように思う。第一に、愛国心の醸成によってアメリカ批判に抵抗するという態度、第二に、規範的問題を政治的にペンディングすることによってこれを継続的に検討するという態度、第三に、不安を鎮めるための事実記述的な解明を志向する科学的態度、である。

上院議員のヒラリー・クリントンは事件当日、私たちは何よりも団結していることが重要であると述べたが、これは防衛本能を愛国心に結びつけるためのストレートな表現であった。人々は事件後に、これまで享受してきた「自由」社会に危険と不安を感じ、自由を捨てて深く共同体の文脈に埋め込まれていたいという焦燥に駆られたようだ。危険で不安な自由からの逃走と、これに代替するものとしての愛国心。愛国感情は、中流労働者階級を中心に次第に広がっていった。アメリカの最もすぐれた精神の伝統を回復するという愛国的な動きは、例えば世界貿易センターで亡くなった消防士や警察官たちの英雄化言説に象徴されよう。こうした動きの中で、デマゴグたちのアメリカ批判は相対化されることになった。

他方では、規範的・政策的な問題が再検討されはじめた。ブッシュ大統領は事件当日の声明において、事件が呼び起こしたさまざまな規範的問題を避け、テロリストの行為を許すのか、それともアメリカとともに戦うのか、という二者択一の選択を迫った。そしてアメリカがもつ諸価値に対して各国のアンビバレントな態度を表明させることなく、価値問題の争点を絞り込むことに成功したように思う。結果として、テロリズムの善悪にかんする問題以外のすべては、アメリカでは防衛的関心を背景に、抜本的に再検討されることになった。例えば対外政策のあり方といった問題は、これまでになく議論されている。デマゴギーよりも態度留保、態度留保よりも分析と再検討、という認識の動きが、他ならぬ防衛本能の下で開始されたのである。

そして第三の現象は、事実記述的な志向の出現である。ニューヨーク市長のジュリアーニ

は、事件後のすぐれた対応によって最も高い評価を得た人物の一人である。彼の人気上昇は、その過剰なまでに事実解明的な会見に負うところが多い。ジュリアーニは事件後、あらゆる悲観的・楽観的推測を控え、事実を克明に語りつづけることによって、人々の不安を鎮めることに成功した。例えば、世界貿易センターにおける遺体回収とその鑑定作業について、身の毛のよだつような内容を分析的かつ詳細に語る。通常の市長が把握できる範囲を超えて、あたかも専門科学者の立場から語るのである。こうした徹底的な事実記述は、各マス・メディアのレポートや記事にも当てはまるだろう。人々の不安は、科学的・事実に言説への代替によって鎮められ、冷静な認識と対応の可能性が示されたのであった。

このように、規範的価値判断に対するペンディング状態を保持しながら冷静に対応するという社会科学的态度は、しかしアメリカでは一定の防衛本能を前提とし、しかもパトリオティズムによる不安の消去と同居していた。また心理的には、人々の認識の営みは、ディオニシアンな興隆とも同居していた。品位のある人であれば口にしないだろうが、心の底では多くの人々が、この壮観な破壊行為に共鳴したに違いない。テロ攻撃は人々の破壊衝動を呼び覚まし、その衝動を自国アメリカに対する批判に向けさせた。それは例えば、「私もグローバリズムのシンボルに対して鞭を打ってやりたかったのだ。テロリストたちは私が臆病でできなかったことを代わりにやってくれたのだ」といった狂気の叫びである。これはまさに、粗野で醜い欲動のディオニシアンに他ならない。ディオニシアンの鼓動は、防衛本能にもとづく認識の背後に抑圧されながらも、確かにうごめいている。

それゆえアメリカにおける当面の問題は、防衛本能に基づく認識の力というものが、いったいどこまで有効なのか、ということだろう。ある意味で、テロリストたちの成し遂げたことは、すでに彼らの勝利として意味づけられるのかもしれない。また他方でアメリカの防衛本能は、その基盤からしてすでに狂っているのかもしれない。そうした中ではじめて認識の鼻が飛び立つというの、なんとも皮肉なシナリオだろう。事件後に作動した認識の営みを手放しで評価することはできない所以である。しかし他方で、私たちが認識の力に何らかの希望を抱かなければならないこともまた、しかと受け止めるべき事実なのである。

(はしもとつとむ・ニューヨーク大学客員研究員 北海道大学大学院助教授 社会哲学)

2001.11.1.脱稿